

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

雨の季節だ。日本語には、雨にまつわる言葉が千以上ある。梅雨に換わる言葉も微雨(ばいう)、麦雨(はくう)、五月雨、黄梅の雨

と多様で、この時季に降りかかる雨を「青葉雨」と呼び、したたり落ちる水滴を「青葉時雨」と呼び、草木を青み、花を咲かせる雨として「雨に花の父母」だとし、生活には無くてはならないものだとして「日本の1年間の平均降水量は約1700ミリで世界平均の2倍にもなり、それゆえ暮らしに身近で、昔も今も自然を感じる瞬間だと京都新聞コラム梵語さんが紹介した。

しかし6月中旬に県内では低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んで大気不安定になり、一時激しい雨が降りJR大糸線は始発から運転を見合わせた。昨年の台風19号災害からまだ8

## 身近な自治体の財政運営を考える事も大切だ

力月。昨年10月、県は高瀬川流域で48時間に「千年に一度」級の741ミリの大雨が降る場所を想定した「浸水想定区域図」を公表した。池田町では流域の平地全域が50センチ以上浸水する可能性を示した。この災害発生の危険を大北地域全体の課題と位置付け、地域として事前の十分な準備と、地域内で安全な場所に早めに避難できる想定を機会あるごとに確認してほしいと願っている。

新型コロナウイルス感染症拡大などの影響で被害対策として、各自治体は独自の支援策を示しているが、各自治体の対応の差に疑問の声が聞こえてくる。東京都は新型コロナ対策で「財政調整基金」を95兆近く取り崩し、残高はおよそ500億円の見通しで、税収が減ることも予想する中で今後の財源確保が課題だ。また北安曇郡池田町は、6月定例議会の一般質問で、平成27年度末8億7300万の財政調整基金が新型コロナ対策費用などを取り下し残高が1億円まで減少して危機的な状況だとし、早急な財政再建に着手したいと答弁した。

「財政調整基金」は、自治体が財源に余裕がある年に積み立て、不足する年に取り崩すことで財源を調整して、計画的な財政運営を行うための貯金だ。今回の感染症の対応はやむを得ない理由での対応だが、積極的な財政運営や度重なる災害対応で財政調整基金の残高の少ない自治体は厳しい状況に置かれている。議会も有権者も改めて財政調整基金の必



激しい降雨で姫川が激流に変貌、今年も災害を心配してしまう

要性を考えてみる大切な機会になったに違いない。(NPO法人信州地域社会フォーラム 会員)